

## 2006年愛知静岡研修旅行

朝の冷え込みが厳しい晩秋の11月16日。辰野サービスエリアに北信組（太田・蛭川・岡田・山本）と、中信木曾組（谷・小松・田島・片山・牧野）が合流。総勢9名。

9:30に出発。

### ギャルリももぐさ

最近マスコミに良く取り上げられ、評判のギャルリ百草。谷さん一押し。多治見インターチェンジで降り、これから行く宮本さん推奨の店で天コロうどんを食べ向かう。狭い道を走りクヌギの雑木林に囲まれた駐車場。移築した大きな日本家屋。安藤さんは陶芸、奥さんは服飾デザイナー。土間を上がると受付と2階に通じる階段箆笥。御代田の村上さんのウィンザーチェアが置かれている。和室は琉球畳。古ぼけたリンゴ箱の上に作品を展示している。床の間には「空気の箱」という意味深の作品名が書かれた焼き物が置いてあった。縁側を廻ると帯戸をはずした広間に服飾関係の展示。陶芸家の有名作家や、木工関係でも三谷さんとか、長野県下の作家の作品も展示されている。谷口さんの箸もありました。喫茶室は洋風で出窓になっており、明るくくつろげる空間であった。現在もっとも注目される和の空間の展示方法の一つであると思う。庭も奥行きがあり、下の空き地も駐車スペースになっている。平日だということに入れ替わり来客があり、土日は混雑が予想される。

### 宮本家具工房・宮本良平さん

名古屋の市街地に工房を構える。製菓会社の営業マンを脱サラ後、カヌーの工場・ジャスコ・中学校の教員を経て独立して7年目。独立前、休日木工で腕を磨く。12年ほど前に雑誌で、カペラガーデンの記事を見てスウェーデンへ。

それ以来、カールマルムステンに傾倒する。木工は楽しく自由に自己実現するものという考え方と、教員の経験で現在木工教室を運営している。母屋とも渡り廊下でつながる構造、教室・ワーキングテーブルもカペラガーデン仕様。

木工講座のサイト、ボンド等の小分けの販売も有名。受講生は40名。教室内は工具・木工機械が整理され安全性を第一に配置されている。宮本さんお勧めの横軸（コッピンマシン）はいろいろと便利に使いそう。これまでの作品も一箇所に置かれていてライティングビューローの扉を下げるとレールが出る構造や、引き出しの木製のスライドレール等凝った作りで興味深い。

### 工房塩津村・井崎正治さん

JR蒲郡駅より車で10分ほどの幹線を一本入った住宅街に工房はある。

大きな工場のような建物で、ぎゃくL字型をしていて左側がギャラリー、右が工房になっている。材料置き場から奥に入ると、機械加工室と作業組み立てスペース。角のみ盤が3~4台。昇降盤が3~4台。大人数で一度に作業が出来るようになっている。大きなバンドソーは古いタイプのようなだった。

井崎さんは1964年15歳のときにロクロ・仏具・漆器の木地作りの親方に弟子入り。木工修業を始める。薪で炊事・軒先で寝起き・ドラム缶風呂。

今の時代からすると過酷な修業時代に見えるが、ここでの修業が影響を与えている。それは仕事ができることより、失敗しても仕事に謙虚に向かう事。日々学ぶ立場が大切。「明けでも暮れても続く平坦な暮らしに、ほんの少しの工夫を加えるのが面白い。」樹も土も自然の中では寡黙。それを人が切り取ってくると、とたんにそれは過飾になる。説得力のあるものの方が強い印象を与えることはわかっている。でも暮らしの中では物がそんなにおしゃべりしなくてもいい。(銀花冬号148号138ページより抜粋)とにかく井崎さん、人とか物とかに優劣をつけることなく、なんでもないものもいいという。毎日仕事は朝9:00から夜7:00。食事をしてから夜中の3:00まで好きな絵や木彫をやる。休みはない。修業時代からの習慣だそうだ。酒もタバコもやらず、ただただ敬服。細身の身体。エネルギー効率がいいのだろう。2年後、椅子100脚。豆絵本100種類の展示会を企画しているという。

夜近くの寿司屋で宴会。木工会9名と、名古屋の宮本さん、井崎さん、工房塩津村関係6名、近くの工房から夫妻2名。計19名。多すぎて井崎さんとは話が出来なかったが盛況だった。

三河湾リゾートリンクスで宿泊。格安の料金で高級リゾートホテルに泊まれるとは井崎さんに感謝・感謝。

翌日波穏やかな三河湾、対岸の渥美半島から昇る朝日を拝む。ここは幡豆郡吉良町。忠臣蔵播州赤穂出身の僕が泊まってはいけない場所だったのか？

同じように海が見えるところで育った僕にとって、海が好きだという井崎さんの気持ちがわからなかった。海のようにどこにでもいける自由を尊ぶ人なのだろう。最後に井崎さんの好きな食べ物はスイカと茄子。これには笑ってしまった。

### 浜松市立秋野不矩美術館

車を止め駐車場から緩やかな坂を登って行くと、だんだんとあまり見かけない得体の知れない建物が見えてくる。見上げるような視点を導くように丘の上に建てたと思われる。ヘアピンカーブを曲がるとその全貌が眺望できる。天竜杉と鉄平石をふんだんに使った建物。上部真ん中にヒノキとサワラの半丸太をくり抜いた雨どいがある。設計者は茅野出身の奇才藤森照信氏だ。たんぼぼハウス・芝棟の研究・路上観察学会で有名な御仁。僕も彼のファンである。中に入ると靴を脱ぎ、葦のような素材の展示廊下。大理石の部屋に秋野さんの作品が並べられている。元々は日本画家だったが、54歳にタゴール大学に赴任。そのとき初めてインドに渡航。それ以後南アジアを題材に描いている。「オリッサの寺院」は大作。あの赤茶けた色がいい。2001年「砂漠のガイド」が絶筆。実に93歳の作品。「ガンガー」・ガンジスを渡る牛の群れは92歳の境地なのだろうか。僕も20代前半にインド・バングラで一年ほど過ごしたが、夕方に地鳴りと共に赤く燃える大地。またインド人が口にするパンを噛み、赤い唾を吐く。

僕の印象は鮮紅色がインドの色と知っている。54歳でインドに行った感受性の違いだろうか。2階では本田宗一郎の偉業展をやっていた。多分同じ世代で接触があったのだろうか？

#### 工房悠 杉山裕次郎さん

東海道新幹線のすぐそばに元鉄工所だったという天井の高いチェンブロック付きのクラシック音楽とコーヒーの香りがする工房。

宮城県出身。中学のときに静岡へ。36歳の時に松本技専に入所。卒業後、民芸の下請けの藤沢さんのところに一年。横浜クラシック家具でも修業し洋家具の考え方も学ぶ。第1回朝日椅子展で入選。技専も同じ木工会の須藤さんと付き合いがある。基本的にキャビネットメーカー。誠実さが売りと杉山さんは言う。

几帳面な方で、前もって僕達全員にプロダクションスタイルオブ工房悠の冊子をいただく。それによるとハンドメイドとして、表面的な美しさだけでなく、適切で高品質な木工技法で構成すると共に機械加工の重視を、強調されていた。

精度を上げた昇降盤・ルーター・面取り盤（シャープナー）サンディングマシン（3点式）特にシャープナーをなぜ使わないか切削面が綺麗に仕上がると、実演を交えて訴えられていたのが印象的だった。ウォルナットを多く使用されていて中でも、クラロウォルナットは大変貴重な樹種（亜種）ブラックウォルナットよりも色調が複雑で縮み歪・こぶ歪等が見られるそうだ。あいにくその材料を見ることは出来なかった。李朝の趣も取り入れた日本的なモダンなデザイン。端正で品格のあるデザイン。かつ機能的な追及を目指している。36歳で木工を始めて色々ご苦労があったと思われませんが、色々教えていただき、頭が下がる思いです。

#### 静岡市立芹沢けい助美術館

登呂遺跡の中に美術館がある。1981年建築家白井晟一氏。石と水と木をモチーフに作られ「石水館」と呼ばれる早川謙之助氏が洋センを使った白木のナラ材の組み天井を製作。裏木曾のナラを使用というが、良く集めたものだと感心する。エジプトのピラミットを作るように権力・財力・技術力がないと出来ないと思った。常設展と芹沢氏のコレクションの中からアフリカ・アジアの民具・日本の民具等が展示されていた。

今回宮本さん・井崎さん・杉山さんお忙しいところ心良く僕達の訪問を受け入れていただきありがとうございました。またいつもの事ながらこの企画を立ててくださった谷会長に感謝いたします。

工房オリザ  
山本俊一